

露肆

泉鏡花

青空文庫

寒くなると、山の手大通りの露店よみせに古着屋の数が殖ふえる。半纏はんでん、股引ももひき、腹掛はらがけ、溝どぶから引揚げたようなのを、ぐにやぐにやと振よじつつ、巻まいつ、洋燈ランブもやつと三分心さんぶんしんが黒くろくす燻ぶりの影かげに、よぼよぼした媼ばあさんが、頭あたまからやがて膝ひざの上まで、荒布あらめとも見える檻樓頭ぼろず巾きんに包くるまって、死んだとも言わず、生きたとも言わず、黙もくつて溝みぞのふちに凍こもり着く見み窄すぼらしげな可哀あわれなものもあれば、常じょうみせ店みせらしく張は出した三方さんぱうへ、絹きぬ二子ふたこの赤大名あかだいな、鼠ねずの子こ持じ縞まという男物おとものの袷あわせ羽織はおり。こころは甲斐かい蓑き絹裏きうらを正札せいさ附つけ、ずらりと並なべて、正面せいめん左右さうぶの棚たなには袖裏そでうらの細ほり赤あかく見えるのから、浅葱あさぎの附紐つけひもの着きいたのまで、ぎつしりと積たか上げあがりて、小さな円鬘まげに結むすった、顔かほの四角しかくな、肩かたの肥ふとった、きかぬ氣かみらしい上かみさんの、黒天鵝絨くろびろうどの襟卷えりまきしたのが、同じ色いろの腕うでまでの手袋てぶきを嵌はめた手に、細こい銀煙管ぎんぎせるを持もちながら、店たなが違ちがいやす、と澄すまして講談本かうだんぼんを、ト円心まるしんに翳かざしていて、行交ふうつきう人の風采ふうさいを、時々ときどき、水す牛縁いぎゆうぶちの眼鏡めがねの上うへからじろりと視ながめるのが、意味いみありそうで、この連中おなには小母御おはごに見みえて――

湯歸りに蕎麦で極めたが、この節当もなし、と自分の身体を突掛けものにして、そそつて通る、横町の酒屋の御用聞らしいのなぞは、相撲の取的が仕切ったという逃尻の、及腰で、件の赤大名の襟を恐る恐る引張りながら、
「阿母。」

などと敬意を表する。

商売冥利、渡世は出来るもの、商はするもので、五布ばかりの鬱金の風呂敷一枚の店に、襦袢の数々。赤坂だったら奴の肌脱、四谷じや六方を踏みそうな、けばけばしい胴、派手な袖。男もので手さえ通せばそこから着て行かれるまでにして、正札が品により、二分から三両内外まで、膝の周囲にばらりと捌いて、主人はと見れば、上下縞に折目あり。独鈷入の博多の帯に銀鎖を捲いて、きちんと構えた前垂掛。膝で豆算盤五寸ぐらいのを、ぱちぱちと鳴らしながら、結立ての大円髻、水の垂りそうな、赤い手絡の、容色もまんざらでない女房を引附けているのがある。

時節もので、めりやすの襯衣、めちやめちやの大安売、ふらんねる切地の見切物、浜から輸出品の羽二重の手巾、棄直段というのもあり、外套、まんと、古洋服、どれも一式の店さえ八九ヶ所。続いて多い、古道具屋は、あり来りで。近頃古靴を売る事は……

長靴は烟突のごとく、すぽんと突立ち、半靴は叱られた体に畏つて、ごちやごちやと浮世の波に魚の漾う風情がある。

両側はさて軒を並べた居附の商人……大通りの事で、云うまでも無く真中を電車が通る……

夜店は一片側に並んで出る。……夏の内は、西と東を各晩であるが、秋の中ばかりは一月置きになつて、大空の星の沈んだ光と、どす赤い灯の影を競いつつ、末は次第に流の淀むように薄く疎にはなるが、やがて町尽れまで断えずに続く……

宵をちと出遅れて、店と店との間へ、脚が極め込みになる卓子や、箱車をそのまま、場所が取れないのに、両方へ、叩頭をして、

「いかななものでございましょうか、飛んだお邪魔になりましたが。」

「何、お前さん、お互様です。」

「では一ツ御不省なすつて、」

「ええ可うございますともね。だが何ですよ。成たけ両方をゆつくり取るようにしておかないと、当節は喧しいんだからね。距離をその八尺ずつというお達しでさ、御承知でもございましょうがね。」

「ですからお恐入りますんで、」

「そこにまたお目こぼしがあるうツてもんですよ、まあ、口明くちあけをなさいまし。」

「難ありがと有う存じます。」

などは毎々の事。

二

この次第で、露店あわいの間は、どうして八尺が五尺も無い。蒟蒻こんにやく、蒲鉾かまぼこ、八ツ頭がしら、お

でん屋の鍋なべの中、混雑ごたごたと込合つて、食物店たべものみせは、お馴染なじみのぶつ切きり餛飩あめ、今川焼、江戸前

取り立ての魚焼うおやき、と名告なりのりを上げると、目の下八寸の鯛焼たいやきと銘を打つ。真似まねはせずとも

可い事を、鱗焼うろこやきは気味が悪い。

引続いては兵隊饅頭へいたいまんじゅう、鶏卵入たまごいりの滋養麵麩じようパン。……かるめら焼のお婆さんは、小さな

店に鍋一つ、七つ五つ、孫の数ほど、ちよんぼりと並べて寂さみしい。

茶めし餛飩掛あんかけ、一品料理、一番高い中空あかあんどうの赤行燈あかあんどうは、牛鍋の看板で、一山三錢二錢に

鬻ひさぐ。蜜柑みかん、林檎りんごの水菓子屋が負けじと立てた高張たかはりも、人の目に着く手術てだてであろう。

古靴屋の手に靴は穿かぬが、外套がいとうを売る女の、釦ぼたんきらきらと羅紗らしやの筒袖。小間物店の若い娘が、毛糸の手袋嵌めたのも、寒さを凌ぐとは見えないで、広告めくのが可憐いじらしい。気取ったのは、一軒、古道具の主人、山高帽。売つても可いそうな肱掛椅子ひしかけいすに反身そりみの頬杖おつえ。がらくた壇上に張交ぜの二枚屏風にまいびようぶ、ずんどの銅あかの花瓶に、からびたコスモスを投込んで、新式な家庭を見せると、隣の同じ道具屋の亭主は、炬燵こたつやぐら櫓に、ちよんと乗つて、胡坐あぐらを小さく、風除けに、葛籠つづらを押立てて、天窓あたまから、その尻まですっぽりと安置に及んで、秘仏はどうだ、と達磨だるまを極めて、寂寞じやくまくとして定じやうに入る。

「や、こいつア洒落しゃれてら。」

と往来が讃めて行く。

黒い毛氈もうせんの上に、明石あかし、珊瑚さんご、トンボの青玉が、こつこつと寂びた色で、古い物語を偲しのばすもあれば、青毛布あおげつとの上に、指環ゆびわ、鎖、襟えり飾かざり、燦爛さんらんと光を放つ合成金の、新時代を語るもあり。……また合成銀と称えるのを、大阪で発明して銀煙草ぎんぎせるを並べて売る。「諸君、二円五十錢じや言うたんじや、可ええか、諸君、熊手屋が。露店の売品の価値ねだんにしては、いささか高値こうじきじや思おもわるるじやろうが、西洋の話じや、で、分るじやろう。二円五十錢、可ええか、諸君。」

と重なり合つた人群集の中に、足許あしもとの溝の縁に、馬乗提灯うまのりちようちんを動き出しそうに据えたばかり。店も何も無いのが、額を仰向けあおむにして、大口を開いて喋る……この学生風な五ツ紋は商人あきんどではなかった。

ここらへ顔出しをせねばならぬ、救世軍とか云える人物。

「そこでじゃ諸君、可ええか、その熊手の値を聞いた海軍の水兵君が言わるるには、可よし、熊手屋、二円五十銭は分つた、しかしながらじゃな、ここに持合わせの銭が五十銭ほか無い。すなわちこの五十銭を置いて行く。直ぐに後金あとしんの二円を持って来るから受取つておいてくれい。熊手は預けて行くぞ、誰も他のものほかに売らんようになあ、と云われましたが、諸君。

手附てつけを受取つて物品を預つておくんじやからあ、」
と俯向うつむいて、唾を吐いて、

「じゃから諸君、誰にしても異存はあるまい。宜よろしゅうございます。行つていらつしやいと云うて、その金子かねを請取うけとつたんじや、可ええか、諸君。ところでじゃ、約束通りに、あとの二円を持つて、直ぐにその熊手を取りに来れば何事もありませんぞ。

そうら、それが遣やつて来ん、来んのじや諸君、一時間経たち、二時間経ち、十二時が過ぎ、

半が過ぎ、どうじや諸君、やがて一時頃まで遣つて来んぞ。

他の露店は皆仕舞うたんじや。それで無うてから既に露店の許された時間は経過して、僅に巡行の警官が見え振という特別の慈悲を便りに、ぼんやりと寂しい街路の霧になつて行くのを視めて、鼻の尖を冷たくして待つておつたぞ。

処へ、てくりてくり、」

と両腕を奮んで振つて、ずぼん下の脚を上げたり、下げたり。

「向うから遣つて来たものがある、誰じやろうか諸君、熊手屋の待つておる水兵じやろうか。その水兵ならばじや、何事も別に話は起らんじや、諸君。しかるに世間というもののはここが話じや、今来たのは一名の立派な紳士じや、夜会の帰りかとも思われる、何分か酔うてのう。」

三

「皆さん、申すまでもありませんが、お家で大切なのは火の用心でありまして、その火の用心と申す中にも、一番危険なのが洋燈であります。なぜ危い。お話しをするまでもあり

ません、過失^{あやま}つて取落しまする際に、火の消えませんが、壺^{つぼ}の、この、」

と目通りで、真^{しん}鍮^{ちゆう}の壺をコツコツと叩く指が、掌掛^{てのひら}けて、油煙^{まつくろ}で真黒。

頭髪^{かみ}を長くして、きちんと分けて、額にふらふらと捌^{さば}いた、女難なきにしもあらずなのが、渡世となれば是非も無い。

「石油が待てしばしもなく、※^{ばつ}と燃え移るから起るのであります。御覧なさいまし、大阪の大火、青森の大火、御承知でありましょう、失火の原因は、皆この洋燈^{ランプ}の墜落から転動（と妙な対句で）を起します。その危険な事は、硝子^{がらす}壺も真鍮壺も決して差別はありません。と申すが、唯^{ただ}今^{いま}もお話しました通り、火が消えないからであります。そこで、手前商いまするのは、ラジーンと申して、金山鉦山におきまして金を溶かしまする処^{ろつぽ}の、炉壺^{ろつぽ}にいたしまするのを使って製造いたしました、口金^{くちがね}の保助器は内務省お届済みの専売特許品、御使用の方法は唯今お目に懸けまするが、安全口金、一名火事知らずと申しまして、」

「何だ、何だ。」

と立合いの肩へ遠慮なく、唇の厚い、真赤^{まっか}な顔を、ぬい、と出して、はたと睨^{にら}んで、酔眼をとろりと据える。

「うむ、火事知らずか、何を、」と喧嘩腰に力を入れて、もう一息押出しながら、

「焼けたら水を打懸けろい、げい。」

と暖をするかと思うと、印半纏の肩を聳やかして、のツと行く。新姐子がばらばらと避けて通す。

と嶮な目をちよつと見据えて、

「ああいう親方が火元になります。」と苦笑。

昔から大道店に、酔払いは附いたもので、お職人親方手合の、そうしたのは有触れたが、長外套に茶の中折、髭の生えた立派なのが居る。

辻に黒山を築いた、が北風の通す、寒い背後から藪を押分けるように、杖で背伸びをして、

「踊つとるは誰じゃ、何しとるかい。」

「へい、面白ずに踊つてるじゃござりません。唯今、鼻紙で切りました骸骨を踊らせしておりますんで、へい、」

「何じゃ、骸骨が、踊を踊る。」

どたどたと立合の背に凭懸つて、

「手品か、うむ、手品を売りよるじやな。」

「へい、八通りばかり認めてござりやす、へい。」

「うむ、八通り、この通か、はッはッ、」と変哲もなく、洒落のめして、

「どうじや五厘も投げてやるか。」

「ええ、投銭、お手の内は頂きやせん、材あかしの本を売るのでげす、お求め下さいやし

。」

「ふむ……投銭は謝絶する、見識じやな、本は幾干だ。」

「五銭、」

「何、」

「へい、お立合にも申しておりやす。へい、ええ、ことの外音声を痛めておりやすんで、

お聞苦しゅう、……へい、お極りは五銅の処、御愛嬌に割引をいたしやす、三銭でござ

いやす。」

「高い！」

と喝って、

「手品屋、負けろ。」

「毛頭、お掛値はございやせん。宜しくばお求め下さいやし、三銭でございやす。」

「一銭にせい、一銭じゃ。」

「あッあ、推量々々。」と對手にならず、人の環の底に掠れた声、地の下にて踊るよう。

「お次は相場の当る法、弁ずるまでもありませんよ。……我人ともに年中虻では不可ません、一攫千金、お茶の子の朝飯前という……次は、」

と細字に認めた行燈をくると廻す。綱が禁札、ト捧げた体で、芳原被りの若いもの。別に紺の羽織を着たのが、板本を抱えてゐる。

「諸人に好かれる法、嫌われぬ法も一所ですな、愛嬌のお守という条目。無銭で米の買える法、火なくして暖まる法、飲まずに酔う法、歩行かずに道中する法、天に昇る法、色を白くする法、婦の惚れる法。」

四

「お痛え、痛え、」

尾を撮んで、によりと引立てると、青黒い背筋が畝つて、びくりと鎌首を擡げる発奮

に、手術服という白いのを被^はつたのが、手を振って、飛上る。

「ええ驚いた、蛇が啖^{くち}い着くです——だが、諸君、こんなことでは無い。……この木製の蛇が、僕の手練に依つて、不可思議なる種々の運動を起すです。急がない人は立つて見て行きたまえよ、奇々妙々感心というのだから。」

だが、諸君、だがね、僕は手品師では無いのだよ。蛇使いではないのですが、こんな処じゃ、誰も衛生という事を心得ん。生命^{いのち}が大切という事を弁別^{わきま}えておらん人ばかりだから、そこで木製の蛇の運動を起すのを見て行きたまえと云うんだ。齒の事なんか言つて聞かしても、どの道分りはせんものだから、無駄だからね、無駄な話だから決して売ろうとは云わんです。売らんのだから買わんでも宜しい。見て行きたまえ。見物をしてお出でなさい。今、運動を起す、一分間にして暴れ出す。

だが諸君、だがね諸君、齒磨^{はみがき}にも種々^{いろいろ}ある。花王齒磨、ライオン象印、クラブ梅香散……ざつと算^{かぞ}えた処で五十種以上に及ぶです。だが、諸君、言つたつて無駄だ、どうせ買いはしまい、僕も売る気は無い、こんな処じや分るものは無いのだから、売りやせん、売りやせんから木製の蛇の活動を見て行きたまえ。」

と青い帽子をずばらに被^{かぶ}つて、目をぎろぎろと光らせながら、憎^{にく}体^{てい}な口振^{くちぶり}で、齒磨

を売る。

二三軒隣では、人品骨柄、天晴、黒縮緬の羽織でも着せたいのが、悲愴なる声を揚げて、殆ど歎願に及ぶ。

「どうぞ、お試し下さい、ねえ、是非一回御試験が仰ぎたい。口中に熱あり、齒の浮く御仁、齒齦の弛んだお人、お立合の中に、もしや万一です。口の臭い、舌の粘々するお方がありましたら、ここに出しておきます、この芳口剤で一度漱をして下さい。」

と一口がぶりと遣つて、悵然として仰反るばかりに星を仰ぎ、頭髮を、ふらりと掉つて、ぶらぶらと地へ吐き、立直ると胸を張つて、これも白衣の上衣兜から、綺麗なハンケチを出して、口のまわりを拭いて、ト恍惚とする。

「爽かに清き事、」

と黄色い更紗の卓子掛を、しなやかな指で弾いて、

「何とも譬えようがありません。ただ一分間、一口含みまして、二三度、口中を漱ぎますと、齒磨楊枝を持ちまして、ものの三十分使いまするより、遙かに快くなるのであります。口中には限りません。精神の清く爽かになりますに従うて、頭痛などもたちどころに治ります。どうぞ、お試し下さい、口は禍の門、諸病は口からと申すではありませんか、齒は

大事にして下さい、口は綺麗にして下さいまし、ねえ、私が願います、どうぞ諸君。」

「この砥石といしが一挺ちようありましたらあ、今までのよに、盥たらひじやあ、湯水じやあとう、騒ぐにはア及びませぬウ。お座敷のウ真中まんなかでもウ、お机、卓子台ちやぶだいの上エでなりとウ、ただ、こいに遣つて、すういすういと擦こすりますウばかりイイ。菜切庖丁なつきりぼうちよう、刺身庖丁さしみぼうちようウ、向ウへ向ウへとウ、十一二度、十二三度、裏を返しまして、黒い色のウ細い砥ウ持もちイましてエ、柔やわらこう、すいと一二度ウ、二三度ウ、撫なでるウ撫るウばかりイ、このウ菜切庖丁が、面白いようにイ切きれまあすうる、切れまあすうる。こいに、こいに、さっくりさっくり横紙が切れますようなら、当分のウ内イ、誰方様どなたさまのウお邸やしきでもウ、切きれものに御不自由はございませぬウ。このウ細い方一挺がア、定価は五銭のウ処ウ、特別のウ割引イでエ、粗あらのと二ツ一所に、名倉なぐらの欠かけを添えまして、三銭、三銭でエ差上げますウ、剪刀はさみ、剃刀磨かみそりとぎにイ、一度ウ磨がせまして、二銭とウ三銭とは右から左イ……」

と賽さいの目に切つた紙片かみきれを、膝にも敷物にもばらばらと夜風に散らして、縞しまの筒袖りり凜々しいのを衝と張つて、菜切庖丁に金剛砂こんごうしゃの花骨牌はながるたほどな砥を当てながら、余り仰向いては人を見ぬ、包ましやかな毛糸の襟巻、頬の細いも人柄で、大道店の息子株。

押並んで、めくら縞の襟の剥はげた、袖に横撫よこなでのあとの光る、同じ紺のだふだふとした

前垂まえだれを首から下げて、千草色の半股引はんももひき、膝のよじれたのを捻ねじつて穿はいて、ずんぐりむつくりと肥ふとったのが、日和下駄ひよりくだで突立つったつて、いけずな倅せがれが、三徳用大根皮剥かわはぎ、というのを喚わめく。

五

その鯉口こいぐちの両肱りょうひじを突張つっぱり、手尖てさきを八ツ口やつくちへ突込つっこんで、頸うなじを襟えへ、もぞもぞと擦附すりつけけながら、

「小母おぼさん、買かつてくんねえ、小父おじ的き買かいねえな。千六本せんろくほんに、おなますに、皮剥かわはぎと一所いしょに出来できらあ。内うちが製造元せいぞうげんだから安いんだぜ。大だい小しょうあらあ。大だいが五錢ごせんで小しょうが三錢さんせんだ。皮

剥めえ一ツ買かつたつてお前めえ、三錢さんせんはするぜ、買かつとくんねえ、あ、あ、あ、」

と引ひんねじ捻ねじれた四角しかくな口くちを、額かまで闊かつと開ひらけて、猪首いくびを附元つけもとまで窘すくめる、と見ると、仰のけざまけざまにおおあくびおおあくび状じょうに大欠伸おほあくび。余より度外どはずれなのに、自分おのれから吃驚びっくりして、

「はっ、」と、突掛つつかかる八ツ口やつくちの手を引張ひきち出して、握拳にぎりこぶしで口くちの端はたをポン、と蓋ふたをする、トほつと真白まっしろな息いきを大きく吹出ふきだす……

いや、順に並んだ、立ったり居たり、凸凹としたどの店も、同じように息が白い。むらむらと沈んだ、燻^{くすぶ}った、その癖、師走空に澄^{すみ}透^{とお}って、蒼^{あお}白^{しろ}い陰気な灯^{あかり}の前を、ちらりちらりと冷たい魂^{たま}が徜徉^{さまよ}う姿で、毫^{もう}碌^{ろく}頭^ず布^{きん}の皺^{しわ}から、押^お立^たてた古服の襟^{えり}許^{もと}から、汚れた襟卷^{ひだ}の襷^{たす}の中から、朦朧^{もうろう}と顫^あれて、揺れる火影^{ほかげ}に入^い乱^{らん}れる処を、ブンブンと唸^{うな}って来て、大路^{おおじ}の電車^{でんしゃ}が風を立てつつ、颯^{さつ}と引^ひ攪^きって、チリチリと紫に光って消える。

とどの顔も白^{しら}茶^{ちや}けた、影の薄い、衣服^{きも}前^ま垂^{たれ}の汚^{よご}目^めばかり火影に目立って、煤^{すす}びた羅漢^{らかん}の、トボンとした、寂しい、濁った形が溝^{みぞ}端^{はた}にばらばらと残る。

こんな時は、時々ぼったりと往来が途絶えて、その時々、対^{むかいあ}合^あった居附^{いつき}の店の電燈^{でんとう}瓦^が斯^すの晃^{こう}々^{こう}とした中に、小僧^{かけ}の形や、帳場の主人、火鉢^{かみさん}の前の女房^{にようばう}などが、絵草子の裏硝子^{うらすずり}の中、中でも鮮麗^{あざやか}なのは、軒に飾った紅^{べに}入^い友染^{ゆうぜん}の影に、くつきりと顫^あれる。

露店^{ろうてん}は茫^{ぼう}として霧に沈む。

たちまち、ふらふらと黒い影が往来へ湧^わいて出る。その姿が、毛氈^{もうせん}の赤い色、毛布^{けつと}の青い色、風呂敷の黄色いの、寂^{さみ}しい媼^{ばあ}さんの鼠色^{ねずみいろ}まで、フト判^{はつ}然^{ぜん}と凄^{すこ}い星の下に、漆^しのような夜の中に、淡^{いろど}い彩^{さい}して顫^あれると、商人^{あきゆうどれん}連^{れん}はワヤワヤと動き出して、牛鍋^{ぎゅうなべ}の唐^{とう}紅^{べに}も、翻^{ひら}然^りと揺^ゆぎ、おでん屋の屋台もかツと気競^{きかい}が出て、白氣^{はくき}濃^じやかに狼煙^{のろし}を揚げる。

翼の鈍い、大きな蝙蝠のように地摺に飛んで所を定めぬ、煎豆屋の荷に、糸のような火花が走って、

「豆や、煎豆、煎立豆や、柔い豆や。」

と高らかに冴えて、思いもつかぬ遠くの辻のあたりに聞える。

また一時、がやがやと口上があちこちにはじまるのである。

が、次第に引潮が早くなつて、——やつと柵にかかった海草のように、土方の手に引摺られた古股引を、はずすまじとて、媼さんが曲つた腰をむずむずと動かして、溝の上へ膝を摺出す、その効なく……博多の帯を引摺みながら、素見を追懸けた亭主が、値が出来ないで舌打をして引返す……煙草入に引懸つただぼ鯨を、鳥の毛の采配で釣ろうと構えて、ストンと外した玉屋の爺様が、餌箱を検べる体に、財布を覗いて鬱ぎ込む、齒磨屋の卓子の上に、お試用に掬出した粉が白く散って、売るものの鰯髯にも薄り霜を置く——初夜過ぎになると、その一時々々、大道店の灯筋を、霧で押伏せらるる間が次第に間近になつて、盛返す景氣がその毎に、遅く重つくるしくなつて来る。ずらりと見渡した皆がしょんぼりする。

勿論、電燈の前、瓦斯の背後のも、寝る前の起居が忙しい。

分けても、真白な油紙の上へ、見た目も寒い、千六本を心太のように引散らして、ずぶ濡の露が、途切れ途切れにぼたぼたと足を打って、溝縁に凍りついた大根剥の悴が、今度は堪らなそうに、凍んだ両手をぶるぶると唇へ押当てて、貧乏揺ぎを忙しくしながら、

「あ、あ、」

とまた大欠伸をして、むらむらと白い息を吹出すと、筒抜けた大声で、

「大福が食いてえなッ。」

六

「大福餅が食べたいとき、は、は、は、」

と直きその傍に店を出した、二分心の下で手許暗く、小楊枝を削っていた、人柄なだけ、可憐らしい女隠居が、黒い頭巾の中から、隣を振向いて、掠れ掠れ笑って言う。

その隣の露店は、京染正紺請合とある足袋の裏を白く翻して、ほしほしと並べた三十ぐらいの女房で、中がちよいと隔つただけ、三徳用の言った事が大道でぼやけて分らず

……但し吃驚するほどの大音であつたので、耳を立てて聞かせたものであつた。
 会得えとくが行くときも無い事だけ、おかしくなつたものらしい。

「大福を……ほほほ、」と笑う。

とその隣が古本屋で、行火あんかの上へ、髯ひげの伸びた痩せた頤おとがを乗せて、平たく蹲うずくまつた病人らしい陰気な男が、釣込まれたやら、

「ふふふ、」

と寂さみしく笑う。

続いたのが、例の高張たかはりを揚げた威勢の可い、水菓子屋、向顱むこうはちまち巻の結び目を、山から飛んで来た、と押立てたのが、仰向けに反そりを打つて、呵々からからと笑出す。次へ、それから引続いて——一品料理の天幕張テントばりの中などは、居合わせた、客交じりに、わはわはと笑を揺ゆする。年内の御重宝ごちようほう九星売が、恵方えほうの方へ突伏つつぶして、けたけたと堪たまらなそうに噴飯ふきだしたれば、苦虫と呼ばれた齒磨屋が、うんふんと鼻で笑う。声が一所で、同音に、もぐらもちが昇天しようと、水道の鉄管を躍り抜けそうな響きで、片側ひとすじ一条、夜が鳴つて、哄どっと云う。時ならぬに、木の葉が散つて、霧の海に不知火しらぬいと見える灯の間を白く飛ぶ。
 なごりに煎豆屋いりまめやが、かツと笑う、と遠くで凄まじく犬が吠ほえた。

軒の辺を通魔がしたのであろう。

北へも響いて、町尽の方へワツと抜けた。

時に片頬笑みさえ、口許に莞爾ともしない艶なのが、露店を守って一人居た。

縦通から横通りへ、電車の交叉点を、その町尽れの方へ下ると、人も店も、灯の

影も薄く齒の抜けたような、間々を冷い風が渡る癖に、店を一ツ一ツ一重ながら、茫と渦

を巻いたような霧で包む。同じ燻ぶつた洋燈も、人の目鼻立ち、眉も、青、赤、鼠色の地

の敷物ながら、さながら鶏卵の裡のように、渾沌として、ふうわり街燈の薄い影に映る。

が、枯れた柳の細い枝は、幹に行燈を点けられたより、かえってこの中に、処々すつきり

と、星に蒼く、風に白い。

その根に、莫塵を一枚の店に坐つたのが、件の婦で。

年紀は六七……三十にまず近い。姿も顔も寡れたから、ちと老けて見えるのであろうも

知れぬ。綿らしいが、銘仙縞の羽織を、なよなよとある肩に細く着て、同じ縞物の膝を

薄く、無地ほどに細い縞の、これだけはお召らしいが、透切れのした前垂を《し》め

て、昼夜帯の胸ばかり、浅葱の鹿子の下《したじめ》なりに、乳の下あたり膨りとした

のは、鼻紙も財布も一所に突込んだものらしい。

ざつと一昔は風情だった、肩掛というのを四つばかりに畳んで敷いた。それを、棲は深いほど玉は冷たそうな、膝の上へ掛けたら、と思うが、察するに上へは出せぬ寸断の継ぎはぎ。填らしい。火鉢も無ければ、行火もなしに、霜の素膚は堪えられまい。

黒縹子の襟も白く透く。

油気も無く擦切るばかりの夜嵐にばさついたが、艶のある薄手な丸髷がツくりと、

焦茶色の絹のふらしてんの襟巻。房の切れた、男物らしいのを細く巻いたが、左の袖口を、ト乳の上へしよんぼりと捲き込んだ袂の下に、利休形の煙草入の、裏の緋塩瀬ばかりが色めく、がそれも褪せた。

生際の曇った影が、瞼へ映して、面長なが、さして瘠せても見えぬ。鼻筋のすつと

通つたを、横に掠めて後毛をさらりと掛けつつ、ものうげに払いもせず……切の長い、

睫の濃いのを伏目になって、上気して乾くらしい唇に、吹矢の筒を、ちよいと含んで、片

手で持添えた雪のような肱を搦む、唐縮緬の筒袖のへりを取った、継合わせもののその、

緋鹿子の媚かしさ。

三枚ばかり附木つけぎの表へ、（一くみ）も仮名で書き、（二せん）も仮名で記して、前に並べて、きざ柿の熟したのが、こつこつと揃ったような、昔は螺たにしが尾になる、これは紅茸べにたけの悟さとを開いて、ころりと参った張はり子の達磨だるま。

目ばかり黒い、けばけばしく真赤まつかな禪ぜん入にゅうを、木兎引ずくひきの木兎、で三寸ばかりの天目てんもく台だい、すすくとある上へ、大は小児こどもの握にぎ拳こぶし、小さいのは団栗どんぐりぐらいな処まで、ずらりと乗せたのを、その俯目ふしめに、ト狙ねらいながら、件の吹矢筒くだんで、フツ。

カタリといって、発奮はつふみもなく引ひくりかえつて、軽く転がる。その次のをフツ、カタリと翻かえる。続いてフツ、カタリと下へ。フツフツ、カタカタカタと毛を吹くばかりの呼吸いきづかに連れて、五つ七つたちどころに、パツパツと石鱖シヤボンだま玉たまが消えるように、上手にでんぐり、くるりと落ちる。

落ちると、片端から一ツ一ツ、順々にまた並べて、初手しよてからフツと吹いて、カタリといわせる。……同じ事を、絶えず休まずに繰返して、この玩弄物おもちゃを売るのであるが、玉章ふみもなし口上くわじもなしで、ツンとしたように黙っている。

霧の中に笑わらいの虹にじが、澆ぼつと渡った時も、独り莞爾にっこりともせず、傍目わきめも触ふらず、同じように

フツと吹く。

カタリと転がる。

「大福、大福、大福かい。」

とちと粘^{なまり}つて訛のある、ギリギリと勘走^{かんそう}つた高い声で、亀裂^{ひび}を入らせるように霧の中をちよこちよこ走^{はし}りで、玩弄^{おんなうしろ}物屋の婦の背後へ、ぬつと、鼠の中折^{なかおれ}を目深^{まぶか}に、領首^{えりくび}を覗^{のぞ}いて、橙^{だいだいいろ}色の背広を着、小造りなのが立つたと思うと、

「大福餅、暖^{あつたか}い！」

また疳^{かん}走^{ばし}つた声の下、ちよいと蹲^{しゃが}む、と疾^{はや}い事、筒服^{ずぼん}の膝をとんと揃えて、横から当^{あた}つて、婦^{おんな}の前垂^{まえだれ}に附着^{くっつ}くや否や、両方の衣兜^{かくし}へ両手^{つっこ}を突込んで、四角い肩して、一ふり、ぐいと首を振ると、ぴんと反らした鼻の下^{ひげ}の髻^{むす}とともに、砂除^{すなよ}けの素通し、ちよんぼりした可愛い目をくるりと遣^やつたが、ひよんな顔。

……というものは、その、

「……暖^{あつたか}い！……」を機^き会^{かい}に、行火^{あんか}の箱火鉢^{ふとん}の蒲団^{ふとん}の下へ、潜^{もぐり}込^こましたと早合点^{はやがってん}の

膝小僧^{ひざこぞう}が、すぼりと気が抜けて、二ツ、ちよこなんと揃^{ともしび}つて、灯に照れたからである。

橙背広のこの紳士は、通り掛^がりの一杯機嫌^{ぞめき}の素見客^{ぞめき}でも何でもない。冷かし数の子の数

には漏れず、格子から降るといふ長い煙草きせるに縁のある、煙草たばこの脂留やにどめ、新發明螺旋仕懸らせんじかけ二ツケル製の、巻まきた苳たばこの吸口を売る、気軽な人物。

自から称して技師と云う。

で、衆を立たせて、使用法を弁ずる時は、こんな軽々しい態度のものではない。

下目づかいに、晃々きらきらと眼鏡を光らせ、額で睨にらんで、帽子を目深まぶかに、さも歴々が忍びていの体。冷々然として落着き澄まして、咳しわぶきさえ高うはせず、そのニコチンの害を説いて、一吸ひとすいの巻苳から生ずる多量の沈澱物をもつて混濁した、恐るべき液体をアセチリンの蒼あおびかり光に翳かざして、屹きと試験管を示す時のごときは、何某なにがしの教授が理化学の講座へ立揚たちあがったごとく、風采四辺ふうさいあたりを払う。

そこで、公衆は、ただ僅わずかに硝子がらすの管へ煙草を吹込んで、びくびくと遣やると水が濁るばかりだけれども、技師の態度と、その口上のばきはきとするのに、ニコチンの毒の恐るべきを知つて、戦慄せんりつに及んで、五割引が盛さかんに売れる。

なかなかどうして、齒科散しかさんが試験薬を用いて、立合たちあいの口中黄色い齒から拭取ふきとった口塩おから、たちどころに、黴菌ばいきんを躍らして見せるどころの比ではない。

よく売れるから、益々ますます得意で、澄まし返つて説明する。

が、夜がやや深く、人影の薄くなったこうした時が、技師大得意の節で。今まで噓くしゃみこらを堪えたように、むずむずと身震いをつつすると、固くなっていた卓子テエブルの前から、早くもがらりと体を砕たいいて、飛上るように衝つと腰を軽く、突然いきなりひよいと隣のおでん屋へ入って、煮込ひとくしを一串引攫ひっさらう。

こいつを、フツフツと吹きながら、すぺりと古道具屋の天窓あたまを撫なでるかと思うと、次へ飛んで、あの涅槃ねはんに入ったような、風除葛籠かざよけつづらをぐらぐら揺ゆぶる。

八

その時きやつきやつと高笑たかわらい、靴をぱかぱかと傍わきへ外それて、どの店と見当を着けるでも無く、脊かがを屈うずくまめて蹲うしろつた婆さんの背後へちよいと踞しゃがんで、

「寒いですね。」

と声を掛けて、トントンと肩を叩いてやったもので。

「きやつきやつ、」とまた笑うて、横歩よこある行きにすらすらすら、で、居合いわす、古女房せなの背せなをドンと啖くらわす。突然いきなり、年増としまの行火あんかの中へ、諸膝もろひざを突つ込んで、けろりとして、娑婆しゃばを

見物、という澄ました顔付で、当っている。

露店中の愛嬌あいぎようもので、総籬そうまがきの柳縹りゆうひようさん。

すなわちまた、その伝で、大福暖あつたかいと、向う見ずに遣った処、手遊屋おもちゃやの婦おんなは、腰のまわりに火の気が無いので、膝が露出むきだしに大道へ、莫塵もくじんの薄霜に間拍子まびようしも無く並んだのである。

橙だいだいいろ色の柳縹子、気の抜けた肩を窄すぼめて、ト一つ、大きな達磨だるまを眼鏡でぎらり。

おんな
婦は澄おとがましてフツと吹く……カタリ……

はツと頤おとがを引く間も無く、カタカタカタと残らず落ちると、直ぐに、そのへりの赤い筒袖の細い雪で、一ツ一ツ拾ひとつて並べる。

「堪たまらんですね、寒いですな、」

と髻ひげを捻ひねった。が、大きに照れた風が見える。

斜は違すにこれながを視めて、前歯の金をニヤニヤと笑ったのは、総髪そうがみの大きな頭に、黒の中山高ちゅうやまたかを堅く嵌はめた、色の赤い、額に畝うね々と筋のある、頬骨の高い、大顔の役人風。迫った太い眉に、大い眼鏡で、胡麻塩髻ごましおひげを貯えた、頤おとがの尖った、背のずんぐりと高いのが、緋かすりの綿入羽織を長く着て、霜降のめりやすを太く着込んだ巖がんじよう丈な腕を、客商売

とて袖口へ引込めた、その手に一条の竹の鞭を取って、バタバタと叩いて、三州は岡崎、備後は尾ノ道、肥後は熊本の刻煙草を指示す……

「内務省は煙草専売局、印紙御貼用済。味は至極可えで、喫んで見た上で買いなさい。大阪は安井銀行、第三蔵庫の担保品。今度、同銀行蔵掃除について払下げに相成つたを、当商会において一手販売をする、抵当流れの安価な煙草じゃ、喫んで芳ゆう、香味、口中に遍うしてしかしてそのいささかも脂が無い。私は痰持じゃが、」

と空咳を三ツばかり、小さくして、竹の鞭を袖へ引込め、

「この煙草を用いてから、とんと悩みを忘れた。がじゃ、荒くとも脂がありとも、ただ強いのを望むという人には決してこの煙草は向かぬぞ。香味あつて脂が無い、抵当流れの刻はどうじゃ。」

と太い声して、ちと充血した大きな瞳をぎよろりと遣る。その風采、高利を借った覚えがあると、天窓から水を浴びそうなが、思いの外、温厚な柔和な君子で。

店の透いた時は、そこらの小児をつかまえて、

「あ、然じゃでの、」などと役人口調で、眼鏡の下に、一杯の皺を寄せて、髯の上を撫で下げ撫で下げ、滑稽けた話をして喜ばせる。その小父さんが、

「いや、若いもの。」

という顔がんしょく色で、竹の鞭を、卜筮しやくに取つて、尖さきを握つて捻ねじむ向きながら、帽子の下に暗い額で、髻の白いに、金あらわが顕ほくそえみな北叟笑。

附穂つぎほなさに振返つた技師は、これを知つてなお照れた。

「今ごろうに御覽じろ。」

と遠灯とおびの目まばたきをしながら、揃えた膝をむくむくと揺ゆつて、

「何て、寒いでしょう。お寒い。」

と金切声を出して、ぐたりと左の肩へ寄より凭かかる、……体の重量おもみが、他愛ない、暖簾のれんの相撲で、ふわりと外れて、ぐたりと膝の崩れる時、ぶるぶると震えて、堅くなつたも道理こそ、半纏はんてんの上から触つても知れた。

げつそり懷ふところ手てをしてちよいとも出さない、すらりと下つた左の、その袖は、何も支おんえぬ、婦おんなは片手が無いのであつた。

もうこの時分には、そちこちで、徐々そろそろ店を片附けはじめ。まだ九時ちつと廻ったばかりだけれども、師走の宵は、夏の頃の十二時過ぎより帰途かえりを急ぐ。

で、処々、張出しが除れると、傘が窄まるからかさすぼ、その上に冷い星が光を放って、ふつつつと洋燈ランプが消える。突張りの白木の柱が、すすくと夜風に細って、積んだ棚が、がたがた崩れる。その中へ、炬燵こたつが化けて歩行あるき出した体に、むつくりと、大きな風呂敷包を背負しよった形が糺せりあが上る。消え残った灯の前に、霜に焼けた脚が赤く見える。

中には荷車が迎むかいに来る、自転車を出すのもある。年寄には孫、女房にはその亭主が、どの店にも一人二人、人数が殖ふえるのは、よりよりに家から片附けに来る手伝、……とそればかりでは無い。思い思いに気の合ったのが、帰際かえりぎわの世間話、景氣の沙汰さたが主なるもので、

「相変らず不可いけますまい、そう云つちや失礼ですが。」

「いえ、思つたより、昨夜ゆうべよりはちつと増ましですよ。」

「また私わたくしどもと来た日にや、お話になりません。」

「御多分には漏れませんか。」

「もう休もうかと思えますがね、それでも出つけますとね、一晩でも何だか皆さんの顔を

見ないじや氣寂しくつて寝られませんか。……無駄と知りながら出て来ます、へい、油
費、えでさ。」

と一処に圄まるから、どの店も敷物の色ばかりで、枯野に乾した襦袢の光景、七
星の天暗くして、幹枝盤上に霜深し。

まだ突立つたまま、誰も人の立たぬ店の寂しい灯先に、長煙草を、と横に取つて細
いぼろ切れを引掛けて、のろろと取つたり引いたり、脂通しの針線に黒く畝つて揃
むのが、かかる折から、齒磨屋の木蛇の運動より凄いのであつた。

時に、手遊屋の冷かに艶なのは、

「寒い。」と技師が寄凭つて、片手の無いのに慄然としたらしいその途端に、吹矢筒を
密と置いて、ただそれだけ使う、右の手を、すつと内懐へ入れると、縺子の帯がきり
りと動いた。そのまま、茄子の挫げたような、褪せたが、紫色の小さな懷炉を取つて、黙
つて衝と技師の胸に差出したのである。

寒くば貸そう、というのであろう。……

挙動の唐突なその上に、またちらりと見た、緋鹿子の筒袖の細いへりが、無い方の
腕の切口に、べとりと血が染んだ時の状を目前に浮べて、ぎよつとした。

どうやら、片手無い、その切口が、茶袋の口を糸でしめたように想われるのである。

「それには及ばんですよ、ええ、何の、御新姐。」と面睨って我知らず口走って、ニコチンの毒を説く時のような真面目な態度になつて、衣兜に手突込んで、肩をもそもそと揺つて、筒服の膝を不状に膨らましたなりで、のそりと立上つたが、忽ちキリキリとした声を出した。

「嫁娶々々！」

長提灯の新しい影で、すすすと、真新しい足袋を照らして、紺地へ朱で、日の出を染めた、印半纏の揃衣を着たのが二十四五人、前途に松原があるように、背のその日の出を揃えて、線路際を静に練る……

結構そうなお爺さんの黒紋着、意地の悪そうな婆さんの黄色い襟も交つたが、男女合わせて十四五人、いずれも俣で、星も晴々と母衣を刎ねた、中に一台、母衣を懸けたのが当の夜の縁女であろう。

黒小袖の肩を円く、但し引緊めるばかり両袖で胸を抱いた、真白な襟を長く、のめるように俯向いて、今時は珍らしい、朱鷺色の角隠に花筭、櫛ばかりでも頭は重そう。ちらりと紅の透る、白襟を襲ねた端に、一筋キラキラと時計の黄金鎖が輝いた。

上が身を堅く花嫁の重いほど、乗せた車夫は始末のならぬ容体なり。妙な処へ楯を極めて、曳据えるのが、がくりとなつて、ぐるぐると磨骨の波を打つ。

十

露店の目は、言合させたように、きよときよと夢に辿る、この桃の下路を行くような行列に集まつた。

おんな 婦もちよいと振向いて、（大道商人は、いずれも、電車を背後にしている）蓬菜を額に飾つた、その石のような姿を見たが、衝と向をかえて、そこへ出した懷炉に手を触つて、上手に、片手でカチンと開けて、熟と俯向いて、灰を吹きつつ、

「無駄だねえ。」

と清い声、冷かなものであつた。

「弘法大師御夢想のお灸でありますソ、利きますソ。」

と寝惚けたように云うと齊しく、これも嫁入を恍惚視めて、あたかもその前に立合わせた、つい居廻りで湯帰りらしい、島田の乱れた、濡手拭を下げた娘の裾へ、やにわに

一束の線香を押着けたのは、あるが中にも、幻のような坊様で。

つくねんとして、一人、影法師のように、びよろりとした黒^{くろ}紬^{つむぎ}の間伸びた被布^{ひふ}を着て、白髪^{しらが}の毛入道に、ぐたりとした真綿^{まわた}の帽子。扁平^{ひらつた}く、薄く、しかも大ぶりの耳へ垂らして、環珠^{わじゆず}数を掛けた、鼻の長い、頤^{おとがい}のこけた、小鼻と目が窪んで、飛出した形の八の字眉。大きな口の下唇を反らして、かツくりと抜衣紋^{ぬぎえもん}。長々と力なげに手を伸ばして、かじかんだ膝を抱えていたのが、フト思出した途端に、居合わせた娘の姿を、男とも女とも弁別^{わきま}える隙^{ひま}なく、馴^なれてぐんなりと手の伸びるままに、細々と煙の立つ、その線香を押着^おけたものであろう。

この坊様^{ほんさま}は、人さえ見ると、向^{むこう}脛^{すね}なり踵^{かかと}なり、肩なり背なり、燻^{くす}ぼった鼻紙を当てて、その上から線香を押当てながら、

「おだだ、おだだ、だだだぶだぶ、」と、齒の無い口でむぐむぐと唱えて、

「それ、利くであしよ、ここで点^すえるは施行^{せぎよう}じやいの。艾^{もぐさ}入らずです。熱うもあすまいがの。それ利くであしよ。利いたりや、利いたら、しよなしよなど消しておいて、また使うであすソ。それ利くであしよ。」と嘗^なめ廻^{てい}す体に、足^{あしもと}許^{もと}なんぞじろじろと見て商う。

高野山秘法の名灸。

やにわに長い手を伸ばされて、はつと後しぎりをする、娘の駒下駄、靴やら冷飯やら、
つい目が疎いかして見分けも無い、退く端の棲を、ぐいと引いて、

「御夢想のお灸であすソ、施行じやいの。」

と鯰が這うように黒被布の背を乗出して、じりじりと灸を押着けたもの、堪ろうか。

「あれえ、」

と叫んで、ついと退く、ト脛が白く、横町の暗に消えた。

坊様、眉も綿頭巾も、一緒に天を仰いで、長い顔で、きよとんとした。

「や、いささかお灸でしたね、きやツ、きやツ、」

と笑うて、技師はこれを機会に、殷鑑遠からず、と少しく窘んで、浮足の靴ポカポカ、ばらばらと乱れた露店の暗い方を。……

さてここに、膾膾膾を翳ぐ一漢子！

板のごとくに硬い、黒の筒袖の長外套を、瘦せた身体に、爪尖まで引掛けて、耳の
あたりに襟を立てた。帽子は被らず、頭髮を蓬々と抓み棄てたが、目鼻立の凜々しい、
頬は寡れたが、屈強な壮佼。

渋色の逞しき手に、赤錆ついた大出刃を不器用に引握って、裸体の婦の胴中を切

放して燻いぶしたような、赤肉と黒の皮と、ずたずたに、血筋かがを膝かつた中に、骨の薄く見える、やがて一抱ひとかかえもあろう……頭と尾ごと、丸漬まるづけにした膾肭臍おつとせを三頭。縦に、横に、仰向けに、胴油紙とうゆがみの上に乗せた。

正面まむきの肋あばらのあたりを、庖丁ほうちようの背でびたびたと叩いて、

「世間ではですわ、めつとせいはあるが、膾肭臍おつとせは無い、と云うたりするものがあるですが、めつとせいにも膾肭臍おつとせにも、ほんとのもんは少いですが。」

無骨な口で、

「船に乗つとるもんでもが……現在、膾肭臍おつとせを漁とつた処で、それが膾肭臍おつとせ、めつとせいという区別は着かんもんで。」

世間で云うめつとせいというから雌でしょう、勿論、雌もあれば、雄もあるですが。

どれが雌だか、雄だか、黒人くろうとにも分らんで、ただこの前歯まづくろを、

と云つて推重おしかさなつた中から、ぐいと、犬の顔のような真黒まつくろなのを擡もたげると、陰干えんかんの臭においが芬ぶんとして、内へ反つた、しゃくんだような、霜柱しもはしらのごとき長い歯を、あぐりと剥むく。

「この前歯まづくろの処ところを、上下うえした噛かみ合あわせて、一寸すきの隙すきも無いのウを、雄や、（と云うのが北国ほこく辺のものらしい）と云うですが、一分一寸ですから、開あいていても、塞ふさいでいても分

らんのうです。

私は弁舌は拙いですが、まず 膾炙確たしかです。膾炙というものは、やたらむたらにあるものではない。東京府下にも何十人売るものがあるかは知らんですがね、やたらむたらあるもんか。」

と、何かさも不平に堪えず、向腹むかつばらを立てたように言いながら、大出刃さきの尖で、繊維を捌すくつて、一ウニコール角のごとく、薄くねつとりと肉を剥はがすのが、——遠洋漁業会社と記した、まだ油の新しい、黄色い長提灯ながぢようちんの影にひくひくと動く。

その紫がかつた黒いのを、若々しい口を尖とがらし、むしやむしやと噛んで、「二頭がのは売つてしもうたですが、まだ一頭、脳味噌もあるですが。脳味噌は脳病に利くんですが、膾炙の効能は、誰でも知っている事で言うがものはない。

疑わずにお買い下さい、まだ確たしかな証拠というたら、後脚の爪ですが、」

ト大様に視ながめて、出刃を逆手に、面倒臭い、一度に間に合わしよう、と狙つて、ずりりと後脚を擡もたげる、藻搔もがいた形の、水搔みずかきの中に、空を掴くんだ爪がある。

霜風は蠟燭ろうそくをはたはたと揺ゆる、遠洋と書いたその目標めじるしから、濛々もうもうと洋の気が虚空こくうに被かぶさる。

里心が着くかして、寂しく二人ばかり立つた客が、あとしぎりになって……やがて、はらはらと急いで散った。

出刃を落した時、赫と顔の色に赤味を帯びて、真鍮の鉋豆煙草の、真中をむずと握って、糸切歯で噛むがごとく、引啣えて、

「うむ、」

と、なぜか呻る。

処へ、ふわふわと橙色が露われた。脂留の例の技師で。

「どうですか、臘臍屋さん。」

「いや、」

とただ言つたばかり、不愛想。

技師は親しげに擦寄って、

「昨夜は、飛んだ事でしたな……」

「お話になりません。」

「一体何の事ですか、」

「何やいうて、彼やいうて、まるでお話にならんですが、誰が何を見違えたやら、突い

きなり
然しらべに来て、膾膾臍の中を捜すんですぞ、真まっしろ白な女の片腕があると言うて。」……

明治四十四（一九一）年二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十三巻」岩波書店

1941（昭和16）年6月30日発行

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年1月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

露肆 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>